

ホームページに世界の大学戦略を見る

(33) 米国の大学の入試とアドミッション

日本とは異なり, 高大接続が アドミッションの基本

山田礼子 同志社大学教授

「高大接続テスト」で問われる入試の意味

先日、文部科学省の委託を受けて2年間にわたって調査を進めてきた北海道大学の調査研究委員会が、「高大接続テスト」の在り方についての最終報告書をまとめた。「高大接続テスト」とは、入試など選抜機能を大きな目的とするテストとは異なり、個々の生徒学習達成度を基準にし、内容は、基礎的教科・科目全般については、教科書に記載されている基本的問題をベースに出題がなされるというテストである。センター試験は、年1回だけしか受験できないが、「高大接続テスト」は年複数回の受験が可能となっており、かつ、素点ではなく、達成度をスコアで示されるので、高校生が目標を立てて、達成していくといった活用もできるという。

「高大接続テスト」が狙上に上ってきた背景としては、大学進学率が50%を超えたユニバーサル化時代において、従来の入試の意味が問い直されてきたことが大きい。入試選抜が一部を除いて、機能しなくなりつつあるにもかかわらず、高校までの学力を適切に把握する装置が開発されていないということが要因のひとつでもある。つまり、従来の日本では、高校教育と大学教育の接続は大学入試のみに依存してきたが、それが今や機能する比率が極端に下がってきているということである。一方で、「高大接続テスト」に限らず、高大接続といえば、高校教育と大学教育の内容や教授法までも含む概念にもなっている。本連載でも扱った米国のAP (Advance Placement) 科目やAP科目試験などがそうした高大接続の代表的な事例でもあるが、日本ではまだまだこの概念の普及はなされていない。

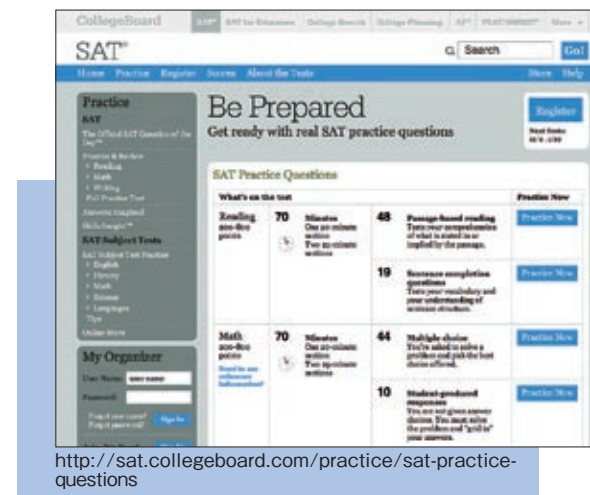
さて、新しい「高大接続テスト」が参考にしたテストとして、米国のSAT (大学進学適性試験) や ACT (米国大学入学テスト) がある。「高大接続テスト」が実際に導入されるようになるまでには、時間もかかり、また乗り越えるべき課題は多いと思われるが、選抜という側面だけで従来語られてきた大学と高校の接続を、入試という切り口から到達度や大学での準備という視点から見るテストの開発には、今後の高校教育と大学教育の実質的な接続への第一歩として期待ができる。

今回は、「高大接続テスト」が参考している米国の大学に入学するために利用されているSATやACTを紹介し、次に米国の大学でのアドミッション(入学)がどのように行われているかを見ていくことにしたい。

SATとACT

SATとACTの特徴は、前者がどちらかといえば、伝統的な大学を保持するための試験であり、後者は大衆化した状況に対応した試験であるとされている。つまり、ACTは、多様な志願者の学力特性をはかって、適合する大学教育のプログラムを探し出し推薦することにより、大学進学者と大学のマッチング機能も果たしている。

SATにはSAT Reasoningテスト(以下SAT推論テストとする)とSAT科目別テストの2種類がある。かつて、多くの大学が入学志願者に提出を求めていたのは、SAT推論テストのほうであったが、最近では推論テストに加えて、科目別テストの受験をアドミッションの要件としている大学も増加しているという。SAT推論テストは、「数学」、「読解」、「文法+エッセイ」の3分野から成り立っており、それ



<http://sat.collegeboard.com/practice/sat-practice-questions>

ぞれが800点満点で合計2400点になるように設計されている。

SAT推論テストはカリキュラムとは関係のない進学適性試験であり、中等教育を修了した者であれば誰もが受験できることから、進学予備軍を作り出さないという特徴を伴っている。SAT科目テストは英語、数学、科学、社会、言語などの各専門教科のテストが1時間以内で終了するように設計されている。

<http://sat.collegeboard.com/practice/sat-practice-questions>

米国における入試は、高等教育が大衆化するにつれて、様々な改革が行われてきた。例えば、1950年から60年代にかけては、SATは選抜型試験として機能していた。しかし、高等教育が大衆化していくなかで、SAT受験者の得点が下がり続けることとなり、基礎学力試験としてSAT Iが誕生するようになった。1994年にSATは、SAT Iと推論力を測定するSAT IIの2種類から成るテストに複線化された。2002年には知能検査的項目を言語、数学テストから削除して、作文力テストが付加された。こうした改革を経て、現在、SATは到達度評価型試験として位置づけられている。

一方ACTの方も1989年の改革以降、高校での学習到達度の測定から大学での学習に必要な能力の測定が基本的な目的になるなど、その機能は変化してきており、高大接続という観点からテストの中身が構成されるようになってきている。その結果、英語では作文、社会では読解、数学では論理的な思考力と推論力、理科では科学的な

推論力の測定が重視されるようになった。また、1990年代から米国の多くの州では、教育段階に応じて学習目標となる教育スタンダードを示し、それに準拠する進級テストによって生徒たちの到達度評価が実施されるようになった。この動向にも高大接続という視点が反映されている。つまり、高校教育では、入試のための受験勉強よりも、大学で教育を受けるための準備としての教育がより重要視されるようになったという次第である。

1990年代には、新たな入学者選抜方法として入学スタンダードを設定する大学も登場した。この入学スタンダードとは、コンピテンシーやプロフィシエンシーという能力概念で表され、大学入学に必要な能力を大学側が示す仕組みであり、その内容は、高校までに身につけた能力を基準としている。特に、フロリダ州やオレゴン州の大学で普及してきている。

アメリカのアドミッション選考のプロセス

ここまで紹介した内容は、SAT (大学進学適性試験) や ACT (米国大学入学テスト) など大学入学に際して必要なテストである。しかし、米国の大学では、1回だけのテストの結果によって入学が決定されるのではない。SATやACTの受験に関しても、高校生はおおよそ入学の書類を提出する1年前の高校2年生ぐらいから複数回テストを受験することができ、最高得点を志望大学に直接テスト運営団体を通じて送ることが可能となっている。さらに、米国の入試はこうしたテストだけでなく、一連の応募書類や高校時代の成績や履修した科目状況等の総合審査から成り立っていることが重要な点である。

それでは、実際に米国の大学のアドミッション(入学)に必要な要件は何であろうか。具体的には、①高校時代の大学準備科目すなわち大学が高校時代の履修要件として求めている科目の成績(GPA)や全科目の成績(GPA)、②SATもしくはACTの成績、③エッセイ(小論文、作文)、④高校教員等からの推薦書、⑤課外活動、仕事、アルバイト経験などを一連の書類として提出、⑥場合によってアドミッション担当者による面接が付加される。また、親が志望する大学の卒業生であることなども入学を認める重要なポイントとなる場合もある。このように、複合的な要素から判断され、入学が決定されることが米国のアドミッ

ションの特徴であるとまとめられよう。それでは、大学側が求めている学生像と入学要件について、個別大学を事例として見てみよう。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校

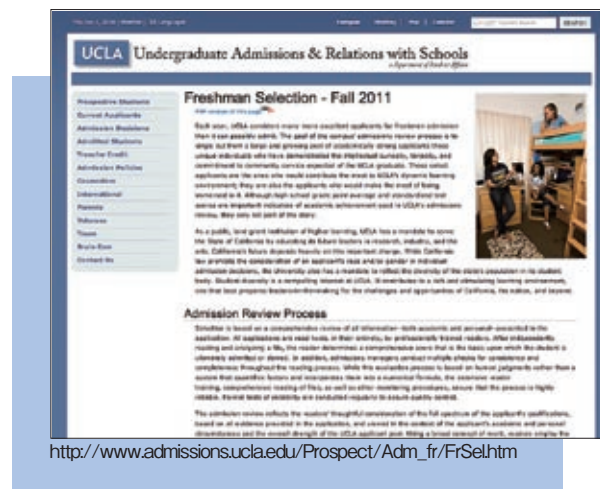
カリフォルニア大学ロサンゼルス校(以下UCLA)の2011年度からの新入生に関するアドミッション・ポリシーとその要件は以下のサイトに示されている。

http://www.admissions.ucla.edu/Prospect/Adm_fr/FrSel.htm

UCLAは、多数の入学志願者が応募する競争率の高い州立大学のひとつである。アドミッション・ポリシーには、学業の優秀な高校生が前提条件として示されているが、同時に、大学が求めている学生像として、「知的好奇心が強い」、「粘り強い」、そして「コミュニティへの貢献ができる」ことが明示されている。つまり、このようなタイプの学生が入学することによって、UCLAが創造したい「力強い学びのコミュニティ」を作り上げていくことにもつながるといえる考え方が根底にある。それゆえ、SATもしくはACTの成績はアドミッションの選考プロセスにおいて不可欠ではあるが、すべてではなく、様々な要素を総合的に勘案して入学者を選ぶことが明確なポリシーとして伝えられている。

次に、入学者選考のプロセスを見てみよう。日本の一般入試では、学力試験による選抜が主であることから、基本的に人物を面接でみることは行われずに、こうした人物評定は、推薦やAO入試に限られている。一方、米国の大学の入学者選考のプロセスでは、学業と人物の両方を見るのが一般的である。UCLAでも、アドミッションに携わる専門担当者によって、応募書類すべてが2度熟読される。書類の熟読と分析が終わると、専門担当者によって総合的なスコアがつけられ、このスコアが合格か不合格かの基準となる。一連の選考プロセスにおいては、アドミッション部門の責任者が2重チェックを行い、質の保証にも十分注意が払われている。

高校時代の大学準備科目の成績(GPA)や単位数においては、以下の科目の履修が大学入学に際しての必要条件となっている。①2年間にわたっての歴史と社会科学科目の履修、②4年間にわたる英語科目の履修、③3年間もし



くは4年間を通じての数学科目の履修、④2年間もしくは3年間を通じての科学(実験を含む)科目の履修、⑤2年間もしくは3年間を通じての外国語科目の履修、⑥1年間のダンス、演劇、音楽などの芸術科目の履修、⑦上記以外の大学準備選択科目の1年間の履修である。とりわけ、4年生(日本での高校3年生)時点で履修した科目が精査され、オナーズ科目の履修や、AP(Advance Placement)科目の履修、AP科目試験の点数、国際バカロレア Higher Levelの履修と試験の点数なども吟味されるようになっている。高校での成績がトップ4%以内であることも入学志願の際の前提条件とされている。

一方、伝統的な学業成績の測定だけでは測ることのできないリーダーシップ能力、性格、動機づけ、粘り強さ、独自性、創造性、独立性、責任感、洞察力、成熟度、他者やコミュニティへの関心、さらには、大学というコミュニティや学生集団、教授陣との交流などにいかに適応できるか、貢献することの可能性についても、専門家によって書類を通じて精査される。

SAT やACT については、UCLAは、SATの科目テストに関して、英文学、歴史・社会科、数学II、科学、外国語の中から2科目の受験、SAT推論テスト、ACT作文テストも要件として課せられている。しかし、UCLAでは点数による足切り制度はなく、2012年からの入学志願者からはSATの科目テストの受験を義務付けないことが表明されているなどアドミッションの選考における改革も進められている。

以上のような学業成績やテストのスコアだけでなく、課外活動、具体的には、芸術やスポーツ等での業績、仕事、ア

ルバイト経験、高校生徒活動、コミュニティ活動も人物を総合的に判断するための要素として重要視されている。そのため、パーソナル・ステートメントというエッセイの提出が求められるが、実は、このパーソナル・ステートメントは、入学選考のプロセスにおいて重要な位置を占めている。パーソナル・ステートメントでは、自分の背景や今までにやり遂げてきた事象、挑戦、そして経験などをコンパクトにまとめるだけでなく、そのエッセイを通じて、知性、個性、そして将来性などがアドミッション担当の専門家に伝わるように書かねばならない。そのため、多くの高校生はこのエッセイ作成に過大な時間を費やすという。

オレゴン州立大学

オレゴン州立大学のアドミッション・ポリシーには、学業の優秀さに加えて、モチベーションが高く、創造性とリーダーシップを備え、異文化への理解が深く、そして他者へのサービスができる人物が、求める学生像として掲げられている。UCLA同様に学業成績関連書類に加えて、様々な入学書類の提出が求められ、アドミッションの選考プロセスを通じて、総合的に精査され、合格が決定される。オレゴン州立大学は、標準テストについては、入学志願者にSAT推論テストやACT作文テストの結果の提出を課している。

オレゴン州立大学においても、高校時代の大学準備科目の成績(GPA)や履修において、特に、次の科目の履修が大学入学に際しての必要条件となっている。具体的には、①3年間にわたっての社会科学科目の履修、②4年間にわたる英語科目の履修、③3年間を通じての数学科目の履修、④2年間を通じての科学科目の履修、⑤2年間を通じての外国語科目の履修である。また、AP科目の履修や国際バカロレア履修などもUCLA同様に重視されている。オレゴン州は前述したコンピテンシーやプロフィシエンシーという能力概念で入学スタンダードを示している州という特徴が入学要件にも現れている。つまり、高校教育との接続を意識した到達度試験が開発され実施されており、その試験であるオレゴンPASS(Proficiency-based Admission Standards Study)の成績や大学での科目の履修なども勘案されているなど、高大接続の部分が明確な特徴として浮かび上がっているといえよう。

入学に際しては、必修14科目の累積GPAが最低3.0以

上であることが学業成績の基準として明示され、クラスでの成績順位やSATの推論テストやACTのスコアも勘案される。もちろん、志願者の個性や課外活動経験や業績などを効果的にまとめたパーソナル・ステートメントの提出が求められ、一連の提出書類をベースに総合的に入学の可否が判断される。

<http://oregonstate.edu/admissions/index.php>

数カ月かけて高校の学習到達度を審査

UCLAやオレゴン州立大学に限らず、多くの大学のアドミッションの要件や選考プロセスはほぼ同様であるが、フロリダ州立大学の場合は、前年度の実績から合格者の基準である高校の成績や、SAT推論テストや、ACT作文テストの得点に関する具体的な基準が明示されているのが特徴である。例えば、2010年の実績から、合格者のGPAは3.5~4.1、ACT作文テストの点数は、25~29点、SAT推論テストの得点は1720点~1940点と示されているので、志願者は合格ラインを予想することができ、進学準備段階での目標を設定しやすいという利点がある。

また、出願する大学にもよるが、専攻(major)を明記しないで、出願できる大学が多いことも米国のアドミッションの特徴でもある。つまり、大学1~2年生の間は一部の専攻(工学、物理等)を除けば、文科系も理科系も一般教養科目を履修し、3年に進級する前に専攻を決定するという遅い決定(late decision)という制度がアドミッションにも反映されている次第である。

ここまで米国の大学のアドミッションのプロセスや基準を見てきたが、一般入試、推薦入試、AO入試を含めても比較的短期間で結果が出る日本の入試とは異なり、多数の書類にもとづき、数カ月かけて大学側で審査するのが米国の大学のアドミッションの選考プロセスの特徴であり、また、それらは、テストだけに限らず、高校時代の科目の履修した内容や到達度にも深く関連していることから、高大接続が米国のアドミッションの基本であるとまとめられる。言い換えれば、入試に関しては、高校入学後に、比較的早期から理系・文系というクラスに分かれて、履修する科目の内容が異なり、また予備校や塾で受験に特化した科目の試験準備に時間を費やす日本の高校生や高校の実態とは共通点が少ないといえるだろう。